

先週の講壇から

「赦してやりなさい」

ルカ による福音書 17章1節～4節

聖句「あなたがたちも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら戒めなさい。そして悔い改めれば、赦してやりなさい。」(17:3)

1. 《滅ぼさない》 イエスの言葉は、人の世の表面的な建前を突き破ります。赦せたとしても7回までしか赦せない人間の現実、他者への愛の思いが憎しみへと劇的に変わっていくような人間の内面を明らかにします。「主よ、何回までですか」と問うところに人間の悲しさがあります。ノアの洪水物語では、神は最初「人が悪いことばかりを心に思い計っている」から滅ぼすと言います。最後は「人が心に思うことは幼い時から悪い」けれども、最早、滅ぼさないと言うのです。
2. 《矛盾せる愛》 これは論理的には矛盾しています。神の愛は人の愛とは違って矛盾せる愛なのです。神の愛は滅ぼすべき罪の存在を赦し、愛し尽くすという矛盾のリアリティーとして現されていきます。合理を超え、人間の罪の現実を超え、それを凌駕し、断罪されるべき罪なる存在を尚も愛し続けることを通して、神は神であることを貫徹されるのです。この物語は、私たちの現実に矛盾として、「にもかかわらず」働いている神の愛のリアリティーを、私たち自らがその矛盾の愛を生きることを通して発見するように私たちを挑発します。私たちも愛するということ、赦すということ、それを合理や計算を超えたもの、矛盾せるものとして経験するように促されているのです。
3. 《十字架の愛》 その「愛の物語」の語り手、促し手、私たちにそのことを仕掛けてくる者、それがイエスです。神の言葉の間に込められた神の愛の矛盾に自らを預けた時、私たちは新しい希望を受け取るのです。赦すという矛盾の愛の中で、愛のリアリティーは十字架のイエス・キリストによって徹底的に明らかにされていきます。独り子を人間の罪の赦しのためにささげたという、神の大いなる愛、十字架の真理は、この矛盾せる愛のリアリティーを感じないところでは躓きとなります。そこでは、イエスという人もまた、単なる道化師でしかないのです。私たちが神の愛、イエスの十字架の愛を感じた時、「赦してやりなさい」というイエスの言葉は、重苦しい律法としてではなく、新しい人間関係の地平を開く、豊かな促しの言葉、希望への言葉として私たちの心に響くのです。

石田 透牧師（甘楽教会）